

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

王安石の士大夫政治思想に関する研究

氏 名

金 肖豊

論 文 内 容 の 要 旨

王安石という人物は、中国の政治史・政治思想史の系譜において非常に重要な位置を占めている。しかし、彼に対する認識は、中国内部の儒教的言説が存在する一方で、主に十九世紀以降の「西洋の衝撃」で次第に確立された言説によって、今日、客観的なものとは言えなくなっているように思われる。要するに、一方では、朱子学が正統思想とされる数百年の長い歴史の中で、朱子学の説とは異なる王安石の学は、近代に至るまで、基本的に異端や邪説とされ、士大夫の主流から批判を浴びていた。他方では、近代になって事情が一変し、彼は、改革変法の先駆けや、合理主義的な思想家、反大地主階級さらに反儒教の闘士などに見做されるようになり、非常に高く評価されるようになっていく。そのほかに、王安石は歴史上有名な「熙寧変法」という改革運動を行ったこともあって、従来の王安石に対する理解は、実務的な政治改革家というイメージを強く帯びている。したがって、思想史分野の研究では、かえって、彼自らが学派を形成した儒者という身分、そして『三経新義』という学問的な著作から伝わる体系的な政治思想という、より重要な方面が見落とされる可能性がある。

これに対して、本研究は王安石の政治思想に対する再検討を目指して、その全体像を歴史上の朱子学に導かれた言説や、近代西洋中心、特にマルクス主義歴史学の視角から脱出させ、しかも改革運動などの政治行為よりも、主に王安石の著作や書簡などのテキストを根拠に、その本来の姿を取り戻させることを試みた。

さらに、二十世紀後半以来、東アジア（とりわけ中国）の伝統文化・政治に対する認識は、日中米各国の学界でも、西洋中心論の定説から脱出して新たな局面を切り拓く傾向が見られつつある。その中で、例えば、日本の溝口雄三氏や、アメリカのピーター・ボル（Peter K. Bol）氏を代表とする学者たちは、儒教に基づく中国史の文脈のなかでその内在的な政治的および社会的発展を捉えようとしている。近年の研究では、宋代以降、特に明清時代に、中国の地方や民間で活発に推進された朱子学者（あるいは道学者）が主導する政治的かつ社会的な運動が注目されている。そこで、本研究は、上述した王安石の政治思想に対する見直しを通じて、いわゆる「唐宋変革」という歴史的背景の中で、朱子学者による新しい政治・社会的運動の推進と王安石との関係性、言い換えれば、なぜ当時主流の

士大夫層が持つ政治関心は、王安石のような中央集権体制の志向から、朱子学者のような「地方自治」（すなわち、地方のことを地方の人々の手で管理する）的な政治・社会運動の推進に転向しつつあったのかという問いを、政治思想の視角で把握しようとし、中国の政治史・政治思想史に対する内在的な理解を深めようと試みた。

それゆえ、本研究は概して下記の論理に沿って自らの論述を展開している。

第一章では、王安石の政治思想と政治行為との間に齟齬が存在することを、文献史料に基づいて論証しようとした。この作業の主眼は、王安石の政治思想と歴史上有名なかの「王安石変法」を分離させることにある。すなわち、通説とは異なり、彼の政治思想に対する考察は、主として具体的な変法政策に頼らず、本人の著作や書簡などのテキストからなされるべきだということが、本研究の主張である。そして、王安石の政治思想と変法における齟齬を論ずることを通じて、彼の思想を正しく把握するために、まず彼を現実政治の複雑さ（権力闘争や皇帝意思など）から切り離し、純粋かつ理想的な状態で彼のテキストに対する検討を改めて行う必要があることを提示した。

その上で、第二章と第三章は厳密なテキスト分析を実施して、王安石の政治思想における本体論（体）と政治構想（用）を考察した。本体論に関して言えば、王安石の学は「道」の原理性を重視し、章句訓詁よりも道徳性命や義理を重んじて、後の朱子学と同じく宋代儒学の新たな潮流に乗っていたと言わざるを得ない。また、政治構想では、彼は『三経新義』を中心に君主の位置づけ・制度構築・社会風習の形成という三つの政治問題に対して自らの答えを出し、士大夫主導による儒教政治の主張を強くアピールした。

ここに至って、王安石はまさに、原理から構想まで、そして経学から政策論まで、いわゆる体用兼備の優れた思想体系を築いてきたように思われる。しかし、彼の学問は一時的に宋代儒学の様々な学派に先んじて官学の地位を獲得したにもかかわらず、後にイニシアティブ争いで徐々に朱子学に敗れ、とうとう歴史の舞台から姿を消してしまう。その王安石の学の退陣は、むしろ中央政界における儒者が唱えた士大夫政治の失敗を意味している。

一方、それに伴ったのは朱子学の台頭である。第四章では、王安石思想の失敗原因を分析し、朱子学が王安石の学を批判しながらもそれを継承し、そのジレンマを克服して地方や民間を中心的な舞台とする政治の幕を開いたことを論じている。要するに、「唐宋変革」の流れの中で、王安石が主張した士大夫主導の中央集権体制は、強化された皇帝独裁体制と対立することを余儀なくされた。そういったジレンマは、理論の面でも実行力の面でもすでに限界点に到達した王安石にとって、とうてい克服することはできなかった。というのは、儒者がリードする士大夫政治の試みは中央政界において事実上行き詰まってしまう、その展開の新たな道を模索しなければならなかったからである。そして、朱子学は王安石の学と抗争しながら、相手からも学び、ついに王安石の未完の「士大夫政治」という課題を新たな方向に導くことができた。本研究は、主に思想研究の分野に限って、王安石の学と朱子学における「道」に対する認識の相異、特に朱子学の「理一分殊」というテーゼが持つ政治的意義を検討することによって、この士大夫政治の転換点を解明しようとしている。

以上、本論文の枠組みを構成する論理性についてその概要を説明した。それでは、王安石の政治思想は、中国儒教の思想史の流れで一体どのような位置づけにあるのだろうか。

筆者は、宋代以降の中国には、主として二つの政治コースが存在していたと考えている。つまり、

一方で、中央の朝廷では君主独裁政治が進み、他方で、地方や民間では士大夫がリードする政治が推進されていたのである。そして、王安石は、まさにこの二つの政治コースが分かれる前の分岐点に立っていたのである。

要するに、唐宋変革によって君主独裁制が確立されたとはしばしば指摘されるものの、実際にはそれとは異なっている。北宋王朝は唐末五代の乱を収めたとはいえ、政治体制の方向づけが定まるまでにはそれなりの試行錯誤を重ねる経験が必要だったのである。少なくとも、大混乱期を経て、すでに土に落ちてしまっていた皇帝の崇高な権威が立て直され、さらにその絶対的な権威が確立されるまで、政治権力を巡って、皇帝と士大夫という二つのアクターが存在していた。王安石は、このような時代に現れた士大夫層の重要な代表者である。彼は士大夫政治の思想の集大成者であって、体系的な政治構想を展開して宰相主導の政治体制を唱え、真正面から皇帝独裁制に挑戦した。しかも、一般的に言って、皇帝の一姓一家の「私」に対して、士大夫が主導する政治は原理的、道義的正当性があり、「公」の政治と見做される。その意味で言えば、王安石を始めとする中央政界の士大夫層は、君主独裁制の方向に対抗して、宋代の中国にもう一つの道の方向を提供していた。

もちろん、後の歴史において証明された通り、中国の君主独裁制は宋の時代から次第に発達し、モンゴル族支配の元を経て、明清時代に至って完全に確立された。ただし、中央政界における士大夫政治の退陣といえども、士大夫政治の失敗とまでは言えない。なぜなら、王安石の時代以降は、二程子（のちには朱子）を始めとする道学者も同じく道の原理性を信じ、「三代の理想」を掲げて士大夫指導の政治を実現しようと努力していたからである。朱子学者にとっては、「理一分殊」という思想的な突破が可能となったうえで、道の実現を中央の政治に限定する必要もなくなり、地方という新しい「空間」を選び取ることに成功したのである。それ以降、士大夫政治の主要な舞台は中央から次第に地方に転向し、前述した通り、宋代以降、朱子学者は三代の理想を掲げながら活発に地方の政治を推進し、明・清を経て後世中国の政治発展に絶大な影響を与えた。

このように、本研究は主として政治思想史の面に限って、王安石思想の在り様を改めて考察し、また朱子学との関係を検討しながら儒教の歴史的発展に関連させ、王安石の学を中国の儒教政治の流れという文脈で再把握する作業を試みた。もちろんその上で、本研究が、中国歴史・政治の歩み方を内面から理解することの一助となりうると考えている。